

ISSN 1345-4889

2020 年度

総合知学会誌

Journal of the Society of Multi-Disciplinary Knowledge

Vol 19, 2020

巻頭言 Operating Article

「Disposition (晒し)」ということについて 荒井 康全

論文 Papers

- | | | |
|---|-------|----|
| 1. 民主主義を拒む日本文化 | 上草 貞雄 | 1 |
| 2. 中国における「九州」の語源と、日本における「九州」
の用例 | 与志耶劫紀 | 18 |
| 3. 「都市を考える」・・・社会学、経済学、工学、環境学、
文化論、グローバルセキュリティから | 松田 順 | 24 |
| 4. システム思考における目的論理構造と社会倫理について XI
～アレキシウス・マイノングと「非存在性対象」を考える意味と
効用について～ | 荒井 康全 | 52 |

研究ノート Shorter Communications

- | | | |
|-----------------------|-------|-----|
| 5. AI と智徳文明私論 | 神出 瑞穂 | 131 |
| 6. 「現代民主主義と国家を考える一考察」 | 松田 順 | 141 |
| 7. 国語の試験問題を読む | 荒井 康全 | 163 |

編集後記

2020 年度活動報告

投稿論文規定

会則

ISSN 1345-4889

2020 年度

総合知学会誌

Journal of the Society of Multi-Disciplinary Knowledge

Vol 19,2020

巻頭言 「Disposition (晒し)」ということについて

会員 荒井 康全

いずれの時代でも同様であるが、ひとが住む社会や国が、平和安全であることは本来まれである。家内安全・商売繁盛・災難免除・国家安寧等の祈念のもと、ひとは経世済民、安全保障、健康厚生、文化教育等政治に対して 英断果敢なる統治をもとめるが、現今、新型コロナのパンデミックの猛威は、全地球規模での人類生存の根幹をゆるがせ、なお予断をゆるさない状態である。このように国難が長期に及ぶと、ひとは国の統治能力にたいしても悲観的な方向にうけとめていくように見みる。たしかにそうかもしれない。

しかし、一方に、国民の全体の空気としては、存外にクールであるようにも見えないわけではない。いわゆる「コロナ過敏」と「平和ボケ」の思考放棄でただに呆けてしまっているともいえないところがある。だから安心というわけでもないが、あえていえば、国民は、意外にしたたかに判断をし、行動しているともいえる。たとえばこの国、その社会の根底に「バクダンあられ」のような黨がある。そこで課題共有のための価値判断の結果だしの手回しプロセスをしているとみることできる。

そういうことを考えた特異な心理学者・哲学者がいた。奥太利の Alexius Meinong(b.1853. 1920d.)である。こういう考えである。

1. ひとは、こころの志向を、「言語」をつかって「対象」として表現する。
2. 「対象」はその意味を持つことができる。
3. ひとは「価値」を「経験」できるが、意外に控えめ (s h y) であり内側に留まっている。たとえば個人的な色彩などの好みや自分もつ困難について語ることは好まない。
4. 同様の筋で、各「価値」はそれぞれの個人の価値でなければならないという実際上のケースはないとした。
5. それは個人の価値経験の仲介を通してはいるが「われわれ」という「非人称的」な次元での「価値判断」として届くとした。
6. しかも「感知」 perception は、「感動」 sensation を基礎にした個人的な「判断」 judgement を含むものであるとした。その「判断」の根拠は、(自由意志は決定することを避けない)、かつ、(自由は強制されない) とした。
7. このような「一般的対象」を「経験対象」 object of value として仕上げるは何かを彼は考えたのである。
8. その根拠が Object(s 対象)であり、この属性を Dispositional としたのである。

これを基礎としたもとに価値経験 value experience、実際の価値 actual value を説明した。価値の対象化つまり、ひとがもつ価値の客体・客観化 Objectivized の基体としての、またひとがもつ価値経験を生産 product する基体としての「対象」基本属性としての「disposition」を置いたのであった。わかりやすいイメージでいえば「価値決定の工場」のようなもので、「価値決定」と

いう反応製品のためのプロセス工程であり、さきの‘バクダンあられ’の出来あがりに必要な反応条件と反応時間量をもつ反応基体としての特性を意味しているといえよう。つまり社会的な規範や施策の配備がおこなわれるまでには一定の時間経過が必要であるという意味にもつながる。外見からとらえるなら国民感情など収束への治まりのための「晒し」であり、あるいは果敢な施策実行として運営のための「配備」と訳することもできる。哲学用語事典としては、「傾向」、「性向」としての訳がある。このプロセスが可視化できるかという問題は、また別の次元の課題であるがただし。今回別稿で、Alexius Meinong をとりあげ、とくに「非存在性対象」や「Disposition（晒し）」ということについて現代社会科学的な対象領域としての解説と考察をしたことを付言する。(2021-10-15)

ISSN 1345-4889

2020 年度

総合知学会誌

Journal of the Society of Multi-Disciplinary Knowledge

Vol 19, 2020

巻頭言 Operating Article

「Disposition (晒し)」ということについて 荒井 康全

論文 Papers

1. 民主主義を拒む日本文化 上草 貞雄 1
2. 中国における「九州」の語源と、日本における「九州」
の用例 与志耶劫紀 18
3. 「都市を考える」・・・社会学、経済学、工学、環境学、
文化論、グローバルセキュリティから 松田 順 24
4. システム思考における目的論理構造と社会倫理について XI
～アレキシウス・マイノングと「非存在性対象」を考える意味と
効用について～ 荒井 康全 52

研究ノート Shorter Communications

5. AI と智徳文明私論 神出 瑞穂 131
6. 「現代民主主義と国家を考える一考察」 松田 順 141
7. 国語の試験問題を読む 荒井 康全 163

編集後記

2020 年度活動報告

投稿論文規定

会則